

植民地学習史料

「大東亜共栄圏はアジアの解放を目指していたのか？」

【用語解説】

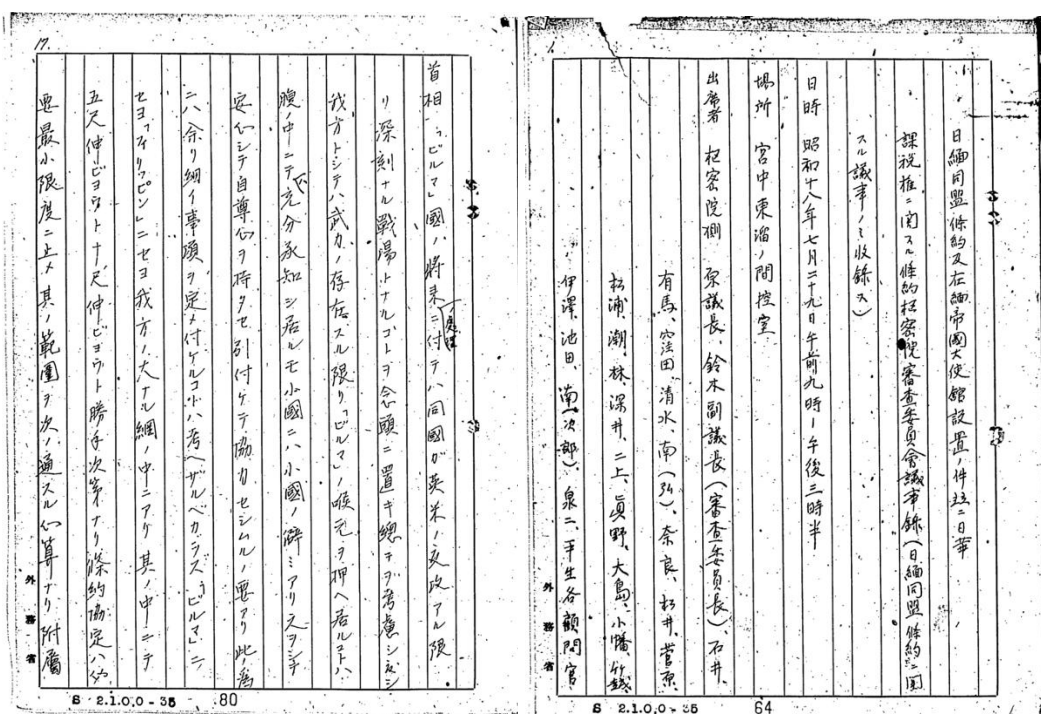
大東亜共栄圏 太平洋戦争中、日本の中国・東南アジアに対する侵略政策を正当化するために唱えられたスローガン。これらの地域から欧米支配を排除し、日本を中心とする共存共栄の大東亜新秩序を説いた。（【山川歴史総合用語解説】）

大東亜共栄圏においては 1943 年にビルマ（緬甸・現ミャンマー）とフィリピンの独立が認められた。その事実も含めて、「アジアの解放」が単なるスローガンだったのか、それとも本当の戦争目的だったのかが学界内外での議論となってきた。アジアの解放を信じて戦った日本軍兵士らもいたことは事実であるが、果たして当時の政策決定者の「本音」はどのようなものだったのか。

【高等学校の主要な歴史教科書との関連】

歴史総合教科書名、記載箇所		単元名
〔東京〕新選 歴史総合	pp. 123, 126	「5 第二次世界大戦の勃発」＋「7 アジア太平洋戦争と日本の敗戦」
〔東京〕詳解 歴史総合	pp. 138-39	「7 アジア太平洋戦争と日本の敗戦」
〔実教〕詳述 歴史総合	p. 166	「48 戦争と民衆」
〔実教〕歴史総合	p. 134	「31 第二次世界大戦の終結」
〔帝国〕明解 歴史総合	p. 133	「戦局の悪化と被害の拡大」
〔山川〕歴史総合 私たちの歴史	pp. 100-101	「12 第二次世界大戦と日本」

〔山川〕 歴史総合 近代から現代へ	p. 148 (註6)	「5 第二次世界大戦と太平洋戦争」
〔清水〕 私たちの歴史総合	p. 83	「12 アジア太平洋戦争」
〔第一〕 新 歴史総合	p. 146	「6 戦争が終わった」
〔第一〕 高等学校 歴史総合	p. 152	「6 第二次世界大戦の終結」
〔明成〕 私たちの歴史総合	記載なし	



「日緬同盟条約及在緬帝国大使館設置ノ件 枢密院審査委員会議事録」表紙および東條首相発言部分

出典 アジア歴史資料センター

「大東亜諸条約締結経緯関係一件 2. 日本国「ビルマ」国間同盟条約」
 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B04013494600、大東亜諸条約締結経緯関係一件 (B. 1. 0. 0. J/X5) (外務省外交史料館)

【読み下し】

〔東條英機〕首相

「ビルマ」（現ミャンマー）国の将来の処置に付ては 同国が英米の反攻ある限り 深刻なる戦場となることを念頭に置き^{すべ}総てを考慮し度し 我方としては 武力の存在する限り「ビルマ」の喉元^{ひが}を押へ居ることは腹の中にては充分承知し居るも 小国には小国の僻^{ひが}みあり 之をして安心して自尊心を持たせ引付けて協力せしむるの要あり 此の為には余り細い事項を定め付けることは考へざるべからず 「ビルマ」にせよ「フィリピン」にせよ我方の大なる網の中にあり 其の中にて五尺伸びようと十尺伸びようと勝手次第なり

【資料解説】

「アジアの解放」を唱えていた大東亜共栄圏における日本と東南アジア諸地域との関係の一端を記した資料である。大東亜共栄圏については、現在も日本がフィリピンとミャンマー（当時はビルマ・緬甸）に独立を許与した事実があり、これが「アジア解放」の成果なのか否かという議論が続いている。当該史料は、1943年7月のビルマ（ミャンマー）への独立許与の数日前に、独立直後に日本と締結させるはずであった同盟条約の諮詢のために、東條英機首相が枢密院で行っていた答弁の一部である。枢密院では、顧問官からの質疑に対して、東條が応答していく形で進められたが、この答弁からは、東條首相が、独立を認めたミャンマーに対して、本心ではどのように考えていたのかを読み取ることが可能となる。

【生徒に提示する課題案】

- ① : 「この史料は、大東亜共栄圏下で独立を認められたミャンマー（当時はビルマ・緬甸）に対して、東條英機首相がどのような認識（本音）を持っていたのか、を記している。具体的に東條首相は、ミャンマーをどのように認識していたのかを、考えよ。」
- ② : 「①の分析を踏まえて、大東亜共栄圏は本当に欧米の植民地からアジアを解放する、といえるものだったのかどうかを（GWで）考えよ。」

【模範解答例】

東條は独立を認めたはずのビルマに対して、ビルマは「小国」に過ぎず、「小国には小国の僻(ひが)みあり 之をして安心して自尊心を持たせ引付けて協力せしむるの要あり」と本音を吐露している。

また「我方としては武力の存在する限り「ビルマ」の喉元を押へ居ることは腹の中にては充分承知し居る」、「「ビルマ」にせよ「フィリッピン」にせよ我方の大なる網の中にあり 其の中にて五尺伸びようと十尺伸びようと勝手次第なり」というように、独立とはいっても実際には相手を対等にはみていないばかりか、あくまでの日本の支配下におくためだけの施策であったといえる。

このように、大東亜共栄圏は建前としてはアジアの解放を唱えていたが、本音としては、欧米列国に代わって支配を続けていく、といった関係であったといえよう。

【参考文献】

河西晃祐『大東亜共栄圏』（講談社、講談社選書メチエ、2016 年）217-21 頁

安達宏昭『大東亜共栄圏』（中央公論社、中公新書、2022 年）134-35 頁